uma no
mirai
action

馬のみらいアクション
presented by TCC

Umamira Magazine
-Vol.1-

Take free!

引退競走馬の
これからを考える

Let's take action!

Interview

「勝つよりも大事なこと」福永祐一 騎手

Report

ウマミラ参加者が行く、
馬とのふれあい体験記

contents

P.4-5

インタビュー

目指す〝みらい〟

株式会社TCC Japan
代表取締役　山本高之

P.6-7

引退競走馬って？

・引退競走馬の受け皿は？
・引退競走馬の今
・馬を飼養するために必要なこと
・引退競走馬支援に必要なこと

P.8-25

特集

馬と共に生きる人たち

P.24-25

What's〝UMA

引退競走馬のセカンドキャリア

P.26-33

広がる引退競走馬支援

P.28-31

TCC Japan活動紹介

・引退競走馬の支援活動
・引退競走馬をパートナーとした事業活動
・引退競走馬支援の啓発活動

P.10-13

インタビュー

「勝つよりも大事なこと」

福永 祐一 騎手

日本ダービー3勝など、
日本を代表する騎手として知られる福永騎手。
タブー視されてきた「馬の最期」について、
そして引退競走馬支援について、
今もなお競馬界の中央で活躍する名手はどう考えるのか――。

P.14-15

What's〝UMA

サラブレッドの特徴紹介

P.16-23

レポート

ウマミラ参加者が行く！馬とのふれあい体験記

年齢も競馬歴も違う3人のウマミラ参加者が
牧場で暮らすTCCホースに会いに行きました。
見て、触れて、ともに歩んで、
感じたことを伝えます。

P.32-33

あなたにできること

P.34-35

Special thanks Staff credit

株式会社 TCC Japan
代表取締役
山本高之
Takayuki Yamamoto

目指す〝みらい〟

TCC Japanは新たに、より多くの人に引退競走馬の課題を知ってもらうための啓発活動「馬のみらいアクション」に踏み切ります。なぜ今、啓発に力を入れるのか。代表・山本高之が語ります。

馬の力で故郷に力を

僕は「馬のまち」として知られる滋賀県の栗東で生まれたのですが、幼い頃は馬との接点がほとんどありませんでした。上京後、周りの人にたびたび「栗東って、馬がいるところだよね」と言われ、これほどまで地元は馬で知られているのかと驚いたのを覚えています。

その後、東日本大震災でボランティアに参加する中で、地域の力が重要だと気付かされました。僕も地元の力を高めるために何かできないか。馬のまちとして知られるならば、馬の力を地域にもっと活かせないかと考えるようになりました。

社会と馬をつなぐ

そして栗東に帰り、TCC Japanの運営を開始。「馬とともに社会をゆたかに」をミッションに、主に引退競走馬と地域を結びつける取り組みをしています。日本の競馬は世界有数の規模で、毎年7000頭以上のサラブレッドが生まれています。しかし競馬を引退した後に行き場を失う馬が大勢いるのが現状です。中には乗馬などのセカンドキャリアを歩む馬もいますが、日本では乗馬の敷居が高く、受け皿としては十分ではありません。

そこで僕たちは、引退競走馬を支援する「引退馬ファンクラブTCC」や、ホースセラピーなど引退競走馬の力を活かす事業を展開してきました。また、怪我などで引退した馬が次のステップに進むまでの療養期間を過ごすホースシェルターも運営しています。

引退競走馬の問題

人と馬には多様な関わり方があり、その数だけ価値観があります。それらを尊重しながら、少しずつ丁寧に活動を進めてきたつもりです。

とりわけ競走馬をめぐっては「引退後の行方を追いかけてはいけない」という意識が長く根付いていました。僕はここに本質的な課題があると考えます。このタブー意識が、引退競走馬をめぐる問題に対して声をあげにくい風潮を生み出してきたのではないでしょうか。

ところがここ数年、引退競走馬を救いたいという声が少しずつ上がるようになりました。その声は次第に大きくなり、ついには日本中央競馬会（JRA）も引退競走馬支援団体への助成に乗り出しました。小さな声が集まって、大きな変化を生んだのです。

今、確実に潮流が変わりつつあります。ならばもっと多くの人々とともに引退競走馬をめぐる問題を考えていきたい。みんなでできることをやろうと、堂々と声を上げていきたい。

だからこそ僕たちは今、「馬のみらいアクション」を始めます。

一人ひとりができることを「馬のみらいアクション」

馬のみらいアクションは、引退競走馬を取り巻く現状を広く世の中に知ってもらうための活動です。

僕自身、引退競走馬をめぐる問題に取り組みながら「何をしたらよいかわからない」ともどかしい声を何度も聞いたことがあります。一方で、引退競走馬をめぐる問題についてまだまだ知らない方もいます。競馬ファンのみならず、馬と関わりのない方々にも現状を伝えていきたいです。

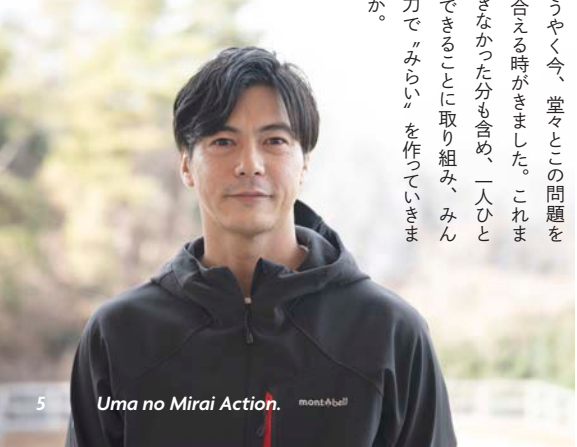
そこでクラウドファンディングでのご協力をもとに、引退競走馬の現状を伝えるコンテンツやアイテムを制作し、それらを活用しながら1年がかりで啓発活動を重ねることにしました。

馬のみらいアクションを通じて、もっとたくさんの人に引退競走馬の〝今〟を知ってもらう。今できることの選択肢を伝え、それぞれができることに取り組む。みんなの力を積み重ねていけば、大きなムーヴメントを生み出せると考えています。

思い描く〝みらい〟

僕たちはあまりにも長い間、この問題に対して目を塞いできました。しかしその間も「なんとかしたい」と思い悩んだ人もいるはずです。競走馬たちはこれまで、たくさんの感動や熱狂を与えてくれました。彼らの物語に幾度と思いを乗せ、心を癒されてきました。そんな彼らが競走馬としての役目を終えても、当たり前のように社会の中で生きられる未来を作る――そうすればみんなも、馬と深く関わる人々も、もっと純粋に馬に愛情を注げるようになりますし、競馬をより一層盛り上げていけるはずです。もちろん、一朝一夕でできることではありませんし、ひとりの力でできることは限られています。けれどみんなの力が集まれば、より大きなエネルギーになると信じています。

ようやく今、堂々とこの問題を話し合える時がきました。これまでできなかった分も含め、一人ひとりができることに取り組み、みんなの力で〝みらい〟を作っていきませんか。



1 クラウドファンディングで一緒に啓発活動に取り組む仲間を募ります。

2 引退競走馬の“今”を知ることができる各種コンテンツを制作します。

3 制作コンテンツを用いた啓発活動を1年間かけて実施します。

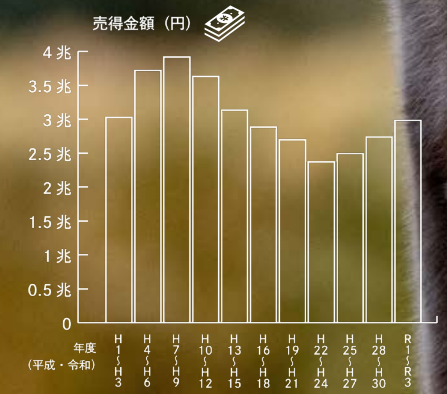
Aim for the destination through the "uma no mirai action."

引退競走馬の受け皿は?

引退競走馬には、乗用馬やセラピー馬、誘導馬や神馬、騎馬隊の所属馬といった道が用意されていますが、やはり多くを占めるのは乗用馬としての活躍になります。日本の乗馬クラブに所属する馬のうち、約 65%がサラブレッドといわれています。しかし問題は、占有率よりも母体の大きさです。競馬ファン人口は 500 万人とも 600 万人ともいわれ 3 兆円市場の巨大産業を形成していますが、乗馬人口はいわゆる乗馬クラブの会員数でいうと 7 万人程度といわれています。圧倒的に受け皿が足りていないのが現状です。さらには、高齢や怪我で働けなくなった馬など、乗用馬としての活躍が難しくなった馬の居場所づくりも必要になってきています。ただ、これだけ多くの引退競走馬が乗用馬に活用されている国は世界でも珍しく、馬事普及が進めばそれだけ引退競走馬が活躍できる場も増えることに繋がります。

JRAの売得金額・総参加人員 統計

出典：JRAの概要「成長推移」売得金額・総参加人員 より (R3.2.8)
https://jra.jp/company/about/outline/growth/pdf/g_22_01.pdf



引退競走馬って?

引退競走馬支援の今

近年、世界中の競馬開催国にとって引退競走馬の福祉は大きなテーマとなっています。世界一の売上を誇る競馬先進国の日本にとっても、当然取り組むべき課題でしょう。「引退した馬の行方を追ってはいけない」という長らくタブーだった時代を経て、ようやく業界全体が動き始めました。大きな転換点は、2017 年に JRA が「引退競走馬に関する検討委員会」を設置したこと。引退競走馬に限定した RRC（引退競走馬杯）という馬術大会の開催や、引退競走馬の養老余生を支援する団体に対して活動奨励金が交付されるなど、引退競走馬支援の波は日々広がっています。

馬の多様な利活用について JRA等の取組状況

施策の検討と情報の収集・発信	引退競走馬に関する検討委員会の開催、国際フォーラム参加、諸調査等の実施
	馬の多様な利活用に関する情報を発信するための競馬場でのイベントや、獣医師学会でのシンポジウム等の開催
セカンドキャリア促進への支援	馬を安全に取り扱う人材を養成するための講習会の開催
	乗馬等への転用のためのリトレーニング技術講習会の開催、引退競走馬を対象とした競技会での賞金提供
	ホースセラピーの活動者向けガイドライン等の作成・配布、技術や考え方に関する講習会の開催
	被災地等での乗馬・引馬体験、馬の展示等の実施
	乗馬施設や教育機関、自治体等が行うホースセラピーや教育、地域活性化等への利活用のモデル的な取組のための繋養費用や施設の補改修等に係る費用の助成
サードキャリア（養老・余生）への支援	養老馬の繋養を行う牧場や引退競走馬の受入先の調整等を行う団体への奨励金の交付
	引退した重賞勝馬の繋養展示を行う施設への繋養費用の助成

出典：農林水産省『馬産地をめぐる情勢 (11p)』より
https://www.maff.go.jp/j/chikusan/keiba/lin/attach/pdf/index-70.pdf

馬を飼養するために必要なこと

個人で引退競走馬を引き取ろうとすると、どのようなことが必要でしょうか。多くの方にとって「自宅で飼養する」というのは現実的ではないと思いますので、預託料を支払って乗馬クラブや牧場に預けることになります。預託料は飼料代・敷料代・場所代・世話をする方の人件費などが該当します。飼養管理の内容や施設によっても異なりますが、ひと月につきおおよそ 10 万円ほど必要になります。さらに毎月の預託料に加えて、装蹄費・ワクチンなどの定期的な治療費・突発的な怪我や病気による治療費なども発生するため、少なくともトータルで年間 150 万円ほど必要になると考えた方が良さそうです。 また、馬は寿命も長く、長ければ 30 歳前後まで長生きできる動物です。3 歳で競走馬を引退して 30 歳まで生きると仮定すると、1 頭を引き取って天寿を全うするのを見届けるまで何千万円という単位の出費が発生します。馬を引き取るには、それ相応の覚悟が必要になります。

引退競走馬支援に必要なこと

個々人で引退競走馬を引き取ろうとすると経済的なハードルが高いのが現実ですが、一方で、個々人でも出来る支援はたくさんあります。そのためにも、まずは何より「正しい情報を知ること」が重要です。そしてそれを「多くの人に伝える」ことも重要です。一人ひとりが声をあげそれが集まっていくことで、いずれは大きなエネルギーとなっていきます。競馬産業では様々な資源が生み出されていますが、それらが引退競走馬の支援に少しずつ活用されるきっかけになるかもしれません。経済や労力などの直接的な支援とあわせて、この「馬のみらいアクション」のような啓発活動に取り組んで行く必要があると考えているのは、そのためです。

馬と共に生きる人たち

People who live with horses

Interview

Yuichi Fukunaga

日本ダービー３勝など、日本を代表する騎手として知られる福永騎手。
シーザリオやエピファネイア、ジャスタウェイ、ワグネリアン、そしてコントレイル…
歴史的名馬とともに積み上げてきた栄光は、数知れない。
そんな福永騎手が語る、競走馬たちへの想い。
タブー視されてきた「馬の最期」について、そして引退競走馬支援について、
今もなお競馬界の中央で活躍する名手はどう考えるのか――。

〝戦友〟へ感じる責任感

僕が馬の存在を意識し始めたのは、中学生の頃。騎手を志すようになって「馬と一緒に生きていく」と決めた時期でした。父が騎手という家庭に生まれながら幼少期の僕は馬に全く興味がなく、むしろ距離を置いた環境で育ちました。しかしデビューしてからは少しずつ彼らに対して〝戦友〟という感情が芽生えてきました。僕は騎手として仕事で彼らに携わっている以上、馬たちは一番尊重すべき相手だと思っているし、尊敬もしています。彼らに対して可愛いと思う気持ちや愛情がないわけではありませんが、そこはやはり馬が大好きで携わっている方々とは少し違った感覚なのだとは思います。

僕たちの職業は彼らの犠牲のもとに成り立っている部分が少なからずありますし、彼らに対しての尊敬の念や感謝の気持ちを抱くのはもちろんのこと、「大事にしなければいけない」という想いや責任感は持つべきだと思っています。

勝つことよりも大事なこと

「何かで一番になりたい」とこの世界に飛び込んだこともあって、若い頃は勝つことだけが全てと思っていましたし、何よりも自分のことが優先でした。それでも年齢を重ね、多くの経験するうちに仕事に対する考え方、ひいては馬に対する考えや思いも変化してきました。今では「一頭の競走馬」が競走生活を有意義に送れるようにするにはどうするべきかということを考えています。これはもしかすると騎手という立場にある僕が考えることではないのかもしれませんが――例えそうだとしても、限りある時間をできるだけ充実したものにしてあげたいという思いが年々強くなっています。それを実現するためには、勝つことよりも大事なことがあると思います。

多くの馬たちはまだ身体が完成しきっていない2歳から3歳にかけて競走馬としてのキャリアをスタートさせるわけですが、その過程の中で人から過度な要求をされる機会が少なからずあります。彼らに対する大きすぎる期待が故だとはいえ、そのような過度な要求は彼らの心身に大きな負担をかけることに繋がります。管理責任者は調教師であり、その馬の所有者は馬主ですから、僕たち騎手には何かの権限があるわけではありません。しかし、「かけて良い負荷」と「かけてはいけない負荷」との線引きをするのは、実際にレースに乗り、馬の息遣いを一番近くで感じている僕たち騎手にしかできません。そうした判断を調教師や馬主に伝えることで彼らにとっての「最後の防波堤」の役割を果たすことが、騎手の持つ責務の一つだと思っています。

こういうことについて騎手同士で深く語り合う機会は多くないので、他の騎手がどう考えているのかはわかりませんが、僕自身は「故障のリスクを負ってまで勝つべきレースは一つもない」と考えています。誤解があるといけないので付け加えますが、騎手として一つでも上の着順を目指すことは当たり前のことです。ですが、それによって馬の心身に何かリスクを負ってしまうのであれば、「もっと別のアプローチができたはずだ」と思うわけです。例を挙げるのであれば、シーザリオで勝ったアメリカンオークス（２００５年）ですかね。あのレースは勝つには勝ちましたが、もっと彼女にかける負担を少なくして勝つことができたレースだと今でも思っています。

故障のリスクを負ってまで勝つべきレースは一つもない

一人ひとりができることを、少しずつやるかどうか

綺麗事を綺麗事のままで終わらせない

僕たちの責務という点では、引退競走馬への支援もその一つであると考えています。僕がここまで騎手を続けて来られたのは、多くの方々のサポートがあったからということもありますが、一番は、やはり馬たちのおかげです。人が自分の意思で様々な選択をしていくことができるのとは違い、馬は経済動物として生を享け、ひたすら全力に走り続けてくれる存在であるわけです。その恩恵を受けている我々（競馬関係者）が、彼らに対して無条件の敬意や尊敬の念、また余生に対して責任を持つことはある意味、当然のことです。ですから、こと責任という点に関しては、馬に携わる全ての人がその自覚を持ち、各々が少しずつ分け合って受け持つべきだと考えています。こういった話をする際に「綺麗事を並べるばかりでは……」という厳しい意見があるのも理解しています。ですが「0か100か」の問題として捉えるのではなく、「一人ひとりができることを、少しずつやるかどうか」で考えて欲しいと思います。自分一人が行動したことによる成果は目に見えにくいかもしれませんが、そういった人が一人、また一人と増えていけば必ず結果は付いてきます。引退競走馬支援は、たった一人でやりきれるものでもありません。馬に携わる人が増えれば、対応できる馬の数も増えます。あとは個人がその一歩を踏み出すかどうか、責任を感じるかどうかにかかっていると思います。責任という点を考えれば、制度化することも手段の一つだとも思っていて、例えば僕たち騎手が「騎乗一回につき、騎乗料から○円を拠出」という制度を作ったとしたら、一人当たりの金額はそう多くはないかもしれませんが、それが集まれば大きな金額になり、やがて大きな力になります。そういうことを繰り返していけば、綺麗事を綺麗事のままで終わらせることなく実現させることができるはず――そう、僕は考えています。

"馬の尊厳"を考える

では、競馬ファンの方々はどのようなことができるのかというところですが、それぞれの方が、できる範囲でできる限りのことをしてくださればいいと思います。というのも、「競馬ファン」と一括りにしても馬券が好きな方もいれば、馬が走る姿が好きな方もいますし、競馬場の雰囲気が好きだという方もいるはずなのです。その形のどれが正しくて、どれが間違っているかなんてことは絶対になくて、それぞれの競馬の楽しみ方があるべきだと思っています。もちろん、引退競走馬がどうしているかを考える方とそうでない方とがいるわけです。考えてくれる方が多いことに越したことはありませんが、決して強制できることではありません。ふと「あの馬、どうしているのかな」と気にかけてくれる方々が、可能な範囲で携わってくれたらいいなと思います。

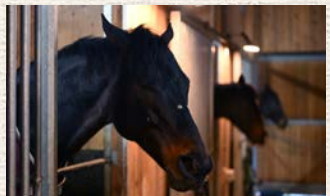
馬を支援したいと思ってくれる方を増やすには、まず多くの方の目に触れる可能性を増やすことが大切ではないでしょうか。だからこそ、引退競走馬支援活動の第一歩として、この「馬のみらいアクション」のような啓蒙活動は絶対に必要になってきますし、このような活動をしてくれる団体が増えてくれることは大変喜ばしいですね。これまで「馬の最期」というのは、関係者の間でも触れることがタブー視されていました。しかし、いつまでもそこから目を背けていては本当の意味での「馬の尊厳」は守れないのだろうと思います。馬の尊厳が保障され、最終的に「馬と一緒の生活」が文化として定着することになれば、馬の活躍できる道や機会は増えていくのではないかと思っています。

"福永祐一"が何か言っているな"

競馬を応援してくださっているみなさんは、僕たちからすれば純粋な競馬の支援者ですから、競馬に対してそれぞれの携わり方、楽しみ方をしていただければと思います。その中で、引退競走馬支援に興味を持ってくださる方々が「何かちょっとでも一緒にできることはないかな」と参加してくださればありがたいです。何度も言うようですが、支援活動は決して無理して行うべきことではありません。僕自身、この支援活動に人生を捧げているわけではありませんし、どこまで深く携われるのかはわかりません。ただ騎手という仕事をしている以上、僕も自分ができる範囲の支援をしていかなければいけないという気持ちは強く持っています。今回、こうして参加させていただいているのも競馬関係者の中での認知度や発信力を考えた時に、「騎手」という立場の人間が言葉にすることが一番有効なのではないか、「福永祐一が何か言っているな」と思っていただけるのであれば、それが僕のできる一番のことなのではないか――と感じたからです。この手の活動に関しては、海外と比較して日本が少し遅れを取っているのは事実です。しかし、ここ数年で手を挙げてくれる人が増えていることもまた、確かな事実です。後輩たちでも、引退競走馬の支援をはじめ、子どもたちの支援活動などにも積極的に取り組む若手騎手が増えてきました。JRAもたくさん活動をしてくれている今、どんどんとこの波を押し進めて、たくさんの方に関心を向けていただけたらと思いますので、ぜひみなさんもご協力をお願いいたします。

福永（ふくなが） 祐一（ゆういち）

1976年生まれ、滋賀県栗東市出身。父・洋一氏は元騎手。96年に騎手デビューを果たし、同年の新人最多勝を記録。99年の桜花賞を制しGⅠ初制覇、13年には初の全国リーディングを獲得している。21年終了時点でJRA通算2517勝、日本ダービー3勝、国内外GⅠ30勝以上を記録する日本有数の名騎手。

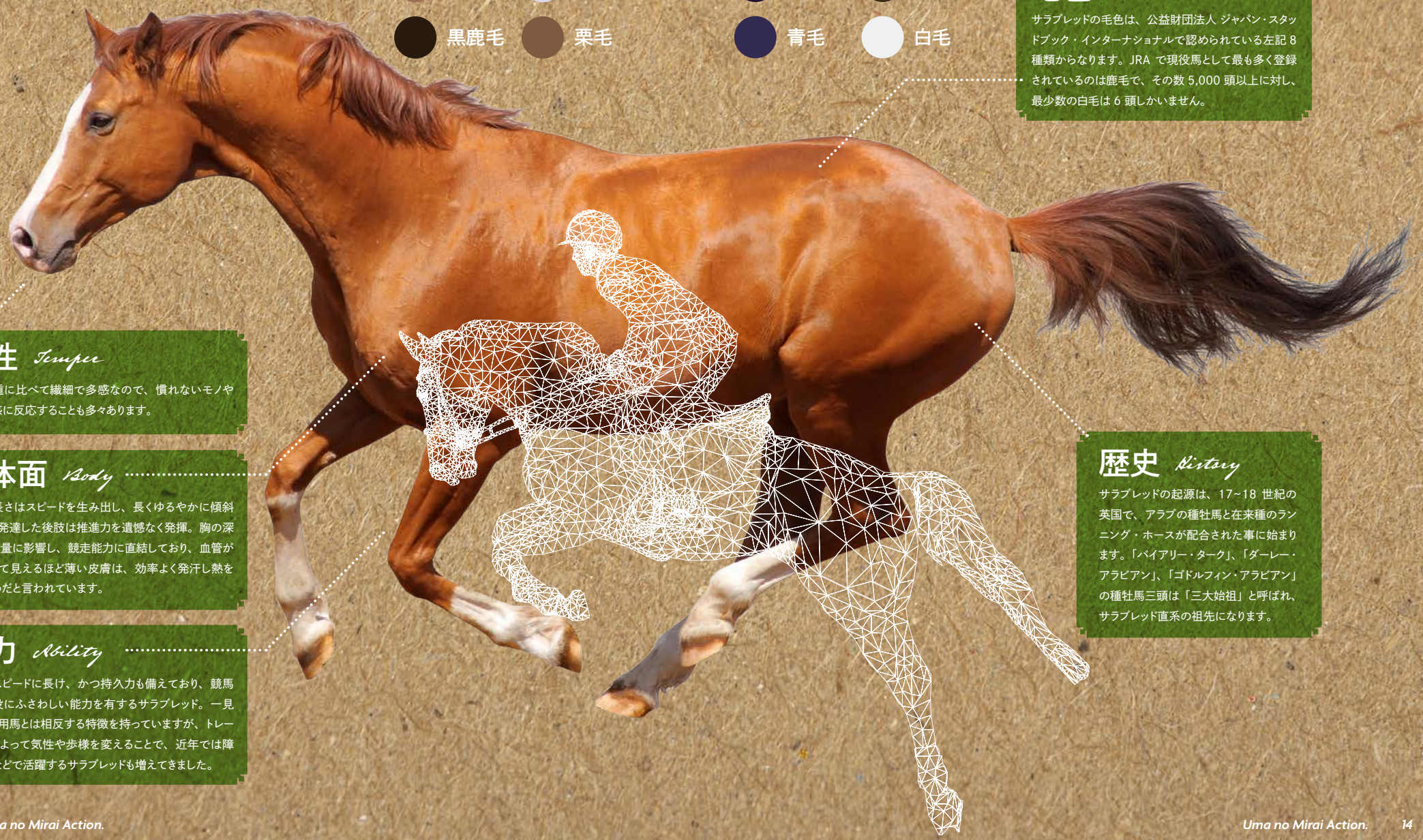


What's "UMA"

サラブレッドの特徴紹介

早く走ることを目的として、長い年月にわたり配合を重ね、品種改良されたサラブレッド。
そんな彼らの特徴を、"まずは知る"ことから始めてみましょう。

鹿毛　芦毛　青鹿毛　栃栗毛
黒鹿毛　栗毛　青毛　白毛



毛色 *Coat color*

サラブレッドの毛色は、公益財団法人 ジャパン・スタッドブック・インターナショナルで認められている左記 8 種類からなります。JRA で現役馬として最も多く登録されているのは鹿毛で、その数 5,000 頭以上に対し、最少数の白毛は 6 頭しかいません。

気性 *Temper*

他の品種に比べて繊細で多感なので、慣れないモノや音に敏感に反応することも多々あります。

肉体面 *Body*

体幹の長さはスピードを生み出し、長くゆるやかに傾斜した肩と発達した後肢は推進力を遺憾なく発揮。胸の深さは肺活量に影響し、競走能力に直結しており、血管が浮き出して見えるほど薄い皮膚は、効率よく発汗し熱を逃すためだと言われています。

能力 *Ability*

強靭でスピードに長け、かつ持久力も備えており、競馬への使役にふさわしい能力を有するサラブレッド。一見すると乗用馬とは相反する特徴を持っていますが、トレーニングによって気性や歩様を変えることで、近年では障害馬術などで活躍するサラブレッドも増えてきました。

歴史 *History*

サラブレッドの起源は、17~18 世紀の英国で、アラブの種牡馬と在来種のランニング・ホースが配合された事に始まります。「バイアリー・タ-ク」、「ダーレー・アラビアン」、「ゴドルフィン・アラビアン」の種牡馬三頭は「三大始祖」と呼ばれ、サラブレッド直系の祖先になります。

ウマミラ参加者が行く!

馬とのふれあい体験記

年齢も競馬歴も違う３人のウマミラ参加者が
牧場で暮らすTCCホースに会いに行きました。
見て、触れて、ともに歩んで、感じたことを伝えます。

Guests
堀内信彦さん
境野銀士朗さん
加藤しのぶさん

緑の馬牧場 場長
新田幸次郎さん

今回参加するのは競馬ビギナーの加藤しのぶさん、メンバー最年少の境野銀士朗さん、20年以上にわたって競馬を愛する堀内信彦さん。年齢や性別、競馬歴も様々ですが、3人とも馬が大好きです。

一行が訪れたのは千葉県成田市にある「緑の馬牧場」。都心から車で1時間ほどのところにある自然豊かな牧場で、3頭のTCCホースをはじめ、サラブレッドやポニー、猫、ヒツジたちが穏やかに暮らしています。

堀内「牧場の風景や放牧されている馬が見えた時からずっとテンションが上がっていますー」

加藤「実は本物の馬を見るのも触るのも初めてで、ドキドキ」

境野「サラブレッドとのふれあいなんて、なかなか経験できないから楽しみです」

早速、スタッフの新田さんの案内のもと、TCCホースたちに会いに行きましょう。

part 1 馬紹介

入り口からそっと覗くと、こちらを興味深そうにじっと見つめているのがリベルタス。一方で激しく首を振っておやつを欲しがっているのがロサギガンティア。「オレさま」キャラで愛されています。その横のザサンデーフサイチは、日本のセリではじめて5億円超の高値が付いた良血馬。元種牡馬ながら大人しい性格。 ご挨拶がてら、にんじんを差し出すと…

馬と共に生きる人たち

part 2 引き馬

続いて3人は手綱を引いて一緒に歩く『引き馬』にチャレンジします。人懐っこいリベルタスが協力してくれました。

馬の歩幅が大きいせいか、自然と人間も早歩きに。3人とも緊張を滲ませつつも、次第に顔つきがほころんでいきます。

堀内「引いているというか、僕の方がリベルタスの後を付いていっている感じかも」

境野「そうですね。絶対手綱を放すものか!と手元に意識が向きました」

加藤「わかります!腕、絶対筋肉痛になる。競馬のパドックでは簡単そうに見えるけど、こんなに大変だなんて知らなかった」

3人を引いて帰ってきたリベルタスは、ついつい牧場長の新田さんの服をかじろうとします。

新田「『頑張ったから見返りをちょうだい』って言っているみたい」

一同「(笑)」

馬の左肩の横に立ち、しっかり手綱を持って前に促せば、馬は歩き出します。さらに手綱をゆっくり動かして方向を示せば、自ずと曲がるそう。「リベ（リベルタス）は、人間に引いてもらっていると思っていない。『にんじんをもらったから仕方ない。ボクが人間を運動させてあげよう』と思っているのでは」と新田さん。

楽しみ〜!

手綱をしっかり握らなきゃ!

境野さんが引く最中、何かに驚いたのかリベルタスが突然立ち上がりそうになるハプニングが。新田さんが遠くの鳥の鳴き声のように「ほーん、ほーん、ほーん…」とやさしく声をかけると、すぐにリベルタスは落ち着きを取り戻し、境野さんと歩みはじめました。

part 3 馬の手入れ

ゴハンに夢中な
ロサギガンティアを相手に
超密着ブラッシング体験！

再び厩舎に戻ると、新田さんはロサギガンティアを馬房から連れ出しました。オレさまキャラのロサギガンティアは、はじめに3人と会ったときも真っ先に顔を突き出しては誰よりもにんじんを欲しがり、3人を驚かせました。新田さんによれば、「乗馬のリトレーニングを受けていないロサ（ロサギガンティア）は競走馬の魂が抜けていないのかも」とのこと。

餌の入った飼葉桶を馬房の入り口に取り付け、そこに向かう形で立たせると、ロサギガンティアはたちまち顔を桶に突っ込み、むしゃむしゃと草を食べ始めました。

新田さんが飼葉桶の横に水桶を運んでくると、ロサギガンティアはふたつの桶を行ったり来たりして、草を湿らせながら食べ始めました。通称・お茶漬け食い。食後に水桶を洗うのが大変だそうです。

新田「それでは、ロサの手入れをしてみましょう」

一同「え〜！大丈夫ですか？」

新田「大丈夫です。毛並みに沿って、ブラシをかけてみてください」

おそるおそる加藤さんがブラシをかけますが、なおもロサギガンティアは草に夢中です。

新田「ね、大丈夫でしょう。試しにお腹のあたりに頬をつけてみてください」

加藤「わあ、ビロードのホットカーペットみたい」

堀内さん、境野さんも続きましたが、やはりロサギガンティアは草を食べるばかり。

新田「食事中は怒らないので、その間にお手入れを行います」

隣にいるザサンデーフサイチにも同じように飼葉を食べる間に手入れができるよう仕込んでいるそうです。

手入れを終えた3人に、新田さんはロサギガンティアの後ろ足を指して説明します。

新田「競馬で故障したところが今でも少し膨らんでいます。たとえば競馬の世界で『屈腱炎』とよく聞きますが、復帰しても炎症が治ったに過ぎず、腱は切れたまま。残った腱で走るため、再発のリスクが伴います。

ロサも大怪我を経験しましたが、この食欲が何度も立ち上がる原動力になってきたのでしょう」

今回お邪魔した牧場

緑の馬牧場では馬の預託のほか、野菜の収穫やバーベキューなど四季折々のイベントを楽しめます。前身はオーナーブリーディングを行う千葉新田牧場。新田さんによれば「引退競走馬についてもともと関心があった。どこを目指していけばよいかわからない中でも、トライアンドエラーを重ねていきたい」との思いでTCCホースの受け入れを始めたそうです。

interview 1

堀内（ほりうち） 信彦（のぶひこ）さん

心の距離がぐんぐん近づいていった

僕は20年以上競馬を見ていますが、まだまだ馬について知らないことが多いなと気付かされました。これまで馬の血統や成績といったデータに支配されている部分があったかもしれません。実際に馬に触れたときの心地、頬を近づけたときに感じた鼓動。ふれあいを通じて、一頭一頭の馬に丁寧に向き合えたような気がします。

初めて会ったときのロサの、大きく開いた口に、あの歯。最初は手ごと持っていかれるのではと身構えてしまいました。

差し出したにんじんをロサが嬉しそうにムシャムシャと食べるのを見て、最初の不安が一気に無くなりました。にんじんをあげればあげるほど、心の距離がぐんぐん近づいていったように感じます。

このまま ずっと一緒に

その後挑戦した引き馬は、思ったよりも難しかったです。競馬場のパドックではスムーズに見えていたので、自然とできるような気がしていましたが…実際には進んでほしいのに進んでくれなかったり、意図せず止まってしまったり。

はじめは焦りましたが、リベの目をじっと見て、僕自身がリラックスするよう心がけたところ、思い通りに動いてくれるようになりました。1周、2周と引くうちに「このままずっとリベと一緒に歩いていられたらいいのに」と、だんだんリベと僕だけの世界に入ったような感覚に。日常では味わえないひとときでした。

今日の体験を通じて、僕は馬とのふれあいの魅力をどんどん周りに伝えていきたいと感じています。それを聞いて、「いいな」と共感してくれたら、ぜひ友達や家族を誘って馬に会いに行ってほしい。そして誘われた人が、また別の友達を誘って…と、馬に関わる人がどんどん広がっていくのが理想的だなと思います。

実際に馬に触れれば、きっと彼らのために何かできることはないかと考えるようになるはず。そうすれば、もっと多くの馬がよりよい馬生を過ごせるようになるのではないかと感じています。

profile

ライター・翻訳者。一口馬主として出資している馬が引退していくうちに引退競走馬支援に関心を持つ。現在は栗東市のふるさと納税、TCCホースの支援等に取り組む。

interview 2

境野（さかいの） 銀士朗（ぎんしろう）さん

何千頭の馬たちはどこに？

ダービーでは大々的に馬を〝何千分の1〟と語ることがありますが、僕はずっと「残りの何千の馬たちはどこにいくのだろう？」と疑問に思っていました。調べてみてもわからないまま、もどかしい気持ちが続くばかり…。20歳の時に一口馬主を始め、より深く競走馬の引退後について考えるようになりました。引退競走馬の問題にフタをして、競馬の楽しいところだけを見ることもできるけど、それではいけない。そんな思いから、今日のふれあい体験に参加するに至りました。

どこかで自分を重ねていた

今日出会った馬たちにはそれぞれ個性がありました。リベは賢くて自分の仕事をわかっているように感じましたし、ロサは暴れん坊だけど素直、良血馬のサンデーは気品があって、人に媚びないところがありました。

僕は特に、大きな期待の下でデビューしたけれど、よいことばかりではなかったサンデーに、どこかで自分を重ねていました。僕自身、「できるだろう」と期待をかけられても、それに応えられなかったことがあります。

そして彼らはみんな、優しく僕たちを受け入れてくれました。僕よりもずっと体が大きいし、その気になればいくらでも人間に危害を加えられるだろうと思っていたけれど、ちっともそんなことはありませんでした。馬たちの優しさに触れ、僕も温かい気持ちになれたように思います。だからロサのお手入れの時は、感謝を伝えるような気持ちでブラシをかけました。

僕の周りには競馬好きがたくさんいますが、こんなにもふれあいを通じて癒されるということも、引退競走馬を支援する道があることも、まだまだ知られていない気がします。これから少しずつ、周りの人々に馬とのふれあいや引退競走馬支援のことを伝えていきたいです。

profile

製造業勤務。兄の影響で中学生の頃から競馬に親しむ。競馬を見始めた頃のスターはゴールドシップ。一口馬主でもあり、競馬場にもよく足を運ぶ。

interview

加藤（かとう） しのぶさん

馬って賢い！

実はコロナ禍で競馬を始めたばかりで、私の中の競馬はテレビの中の世界だけでした。だからこそ、今日の体験の全てがとても新鮮に感じられました。

初めて馬ににんじんをあげたとき、馬と目が合ったのです。目と目で会話するような、不思議な感覚をおぼえました。そして馬の方から「ここだよ」と口を近づけてくれました。私の手に噛み付くようなこともなく、にんじんだけを器用に食べてくれたのです。その時に「馬って賢い！」と思いました。

人と馬ならではの心の通じ合い

引き馬では、歩く速度も曲がり方も、リベがこちらに合わせてくれたように思います。この子たちは、私の気持ちをわかってくれているのかもしれない。こちらが何も言わなくとも、いい意味で見透かしてくれる。人間同士では味わえない、人と馬ならではの心の通い合いを体感できた気がします。

長年生きてきても、まだまだ初めて体験することがあるなあ、と思いました。何かを初めて経験して今日こうして私が関われた。ならば私にもできることがあるはずだし、きっと何らかの自分の役割があるはずだと感じました。実際に何ができるかは自分なりに考えていかなくてはいけませんが、できることなら何でもやろう！と思っています。もちろん自分ひとりるためには自分から進んで行動する必要がありますが、改めて一歩踏み出してよかったなと感じます。

私はまだまだ初心者ですが、長年馬と関わってきた新田さんのお話を聞き、ただ楽しむだけではダメだと強く感じました。同時に、これまで多くの人が引退競走馬支援をコツコツ続けて、ようやく形になり、そしりの力ではそれほど大きなことはできませんが、形はどうあれ、「引退競走馬のことを誰かに伝えていきたい」と思っています。

profile

フリーライター。同居人の影響で買った馬券が的中したのをきっかけに競馬好きに。引退競走馬の現実を知り、自分にもできる限りのことをしたいと考えるようになる。

トークセッション

馬の未来のために わたしたちができること

ますます馬のことが好きになりました

加藤　普段テレビで競馬を見るばかりなのですが、今日はレースとは違う馬の楽しみを味わえました。今日ふれあった馬たちの馬房に貼られたメッセージカードに感動しました。「現役時代を今でも思い出す」「引退してからもファンです」という言葉の数々、きっと馬も嬉しいと思います。そういう馬がもっと増えてほしい。

堀内　わかります。僕もリベルタスたちの現役時代を思い出しながらふれあうのが楽しかったです。

境野　3頭とも横並びで見ると、おのおの個性があって、ただ走るだけの動物ではないと強く感じました。生きていて、感情があって、個性や性格があって、僕たちを癒してくれる。簡単に奪われていい命ではないと思いました。

加藤　そうですね。テレビの画面越しではわからない大きさや感触を味わえて、ますます馬のことが好きになりました。

堀内　たしかに。触ってみれば、もっと馬のことが好きになると思います。「人でも多くの人がこういう経験をしたら、自然と引退後の支援をしたいと思う人は増えていくはず。

加藤　支援してくださいと呼びかける以上に、実際に触れてもらうのが一番伝わりますね。

馬について考える仲間を増やしていきたい

堀内　お手入れの時にも個性を感じましたね。食べている間に手入れをするなど、スタッフの方々も一頭一頭の個性を理解した上で丁寧にケアしていました。

加藤　馬と一括りにしない。子育てと一緒ですね。

境野　あの時ロサの後ろ足も見せてもらいました。競走馬の怪我とは改めて恐ろしいなと。

堀内　競走馬の過酷な一面も見られましたね。

加藤　そういうリスクを背負いながら頑張っていると思ったら、より一層愛おしく感じます。

堀内　今日感じたことをできる範囲で周りに伝えていくことで、馬について考える仲間を増やしていきたいですね。

加藤　馬に触れるにはある程度経験や知識が必要だと思っていましたが、初心者の私も楽しめたので、どんどん周りの人を誘いたいな。

境野　積極的に身近な人に伝えていきたいですね。自分の言葉で伝えるのが一番伝わりやすいですし、周りの人もイメージしやすいかなと思います。

What's "UMA"

Uma 2 Second career

引退競走馬のセカンドキャリア

これまで競走馬として働いてきたサラブレッドたち。競走引退後、彼らにはどのような余生の送り方があるのでしょうか?このページでは、近年注目が集まる競走馬のセカンドキャリアについてご紹介します。

乗馬 Horse riding

引退競走馬のセカンドキャリアとして最もメジャーな乗馬。事実、競走馬登録を抹消された馬たちの約半数は、乗馬という名目で競馬場を去っており、繋養馬の半数以上がサラブレッドという乗馬施設も決して珍しくありません。速く走るために育成され、神経質で感受性豊かなサラブレッドを乗用馬に転用するには、充分な休養期間と綿密なリトレーニングを必要とします。

提供：警視庁

騎馬隊 Cavalry

警視庁騎馬隊には 16 頭の馬が在籍しており、内 15 頭がサラブレットと、引退競走馬が多く活躍しています。交通整理やパトロール、交通安全教育の他、パレード・式典への参加など、その活動は多岐にわたります。日本では他にも騎馬隊が存在し、京都府警の平安騎馬隊では在籍する全 6 頭が競走馬出身で、日々活動に励んでおり、また、皇居警察本部の騎馬隊も宮内庁管轄施設の護衛等を務めています。

競技馬 Competition horse

一般のお客様を乗せる乗用馬に比べ、馬術選手を乗せてよりハイレベルな内容をこなすのが競技馬です。障害馬術は、競馬の障害競走の様に低い飛越ではなく、ポールを落とさないように前肢を曲げ、後肢は上げながら高く飛ぶので、同じ障害でも全く違う性質があります。近年は RRC といった引退競走馬限定の大会が開かれるなど盛り上がりを見せ、引退競走馬の希望の光となりつつあります。

セラピーホース Therapy horse

ホースセラピーは馬とのふれあいを通じて、障がい者の精神機能と運動機能を向上させるリハビリテーションです。他のアニマルセラピーは医療面で心理面と精神面に効果が限られているのに対し、ホースセラピーは医療、教育、スポーツ・レクリエーションの要素を兼ね備え、心と体に効果が認められると言われています。まさに今研究が進む分野であり、引退競走馬の活用が大きく期待されています。

誘導馬 Guided horse

競馬場において、レース出走馬を先導するのが「誘導馬」です。現在 JRA 全国 10 ヶ所の競馬場では、合わせて 100 頭の誘導馬たちが活躍しており、その 9 割以上が競馬を引退したサラブレッドです。誘導馬になるには競走馬時代の成績はあまり関係なく、事実未勝利の馬もたくさん在籍しています。芦毛の馬が選ばれやすいといわれており、現役競走馬では約 6% に対して、誘導馬では 4 割を占めています。

養老馬 Gors horse

競走引退直後の馬に限らず、セカンドキャリアやサードキャリアを引退した馬たちの余生の送り方として、「養老」があります。文字通り養老は馬を養うことが目的で、繋養する馬たちはお金を生み出さないため、競走馬の余生を憂う人たちからの支援で飼養管理するところが主です。しかし、2017 年に JRA が「引退競走馬に関する検討委員会」を設置し、引退競走馬の養老余生を支援する牧場や団体に活動奨励金が交付されるなど、新たな動きが生まれています。

広がる引退競走馬支援

Widespread retirement support

TCC Japan 活動紹介

馬と共に社会をゆたかに

TCC Japan では馬のまち栗東（滋賀県栗東市）を活動拠点とし、引退馬ファンクラブ TCC を通じた引退競走馬の「支援活動」や引退競走馬をパートナーとしたホースセラピーなどの「事業活動」、引退競走馬支援の「啓発活動」に取り組んでいます。

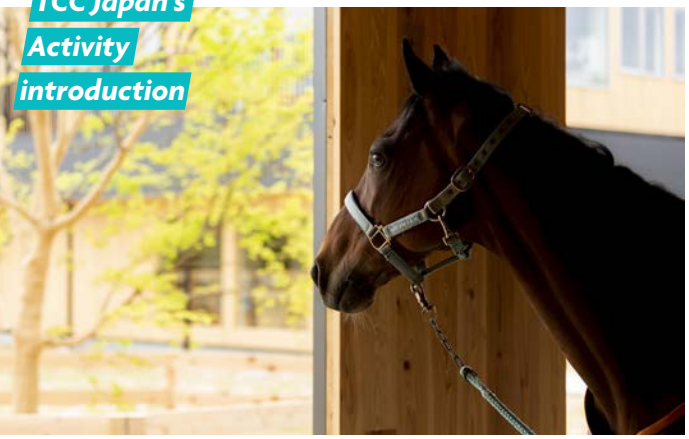
Act.1 引退競走馬の支援活動

引退馬ファンクラブ ＴＣＣ

馬を support! 「救う」 ホースシェルター®

栗東にある TCC セラピーパークでは、日本初の取り組みとして引退競走馬の一時避難場所となるホースシェルター®を常設。怪我を負い、行先がない馬たちが療養を終えるまでの居場所となっています。怪我の為に十分な運動が出来ない馬も多いため、飼料にも工夫をし、獣医師による定期的な診察と装蹄師との密な連携で、セカンドキャリアが決まるまでの療養期間を万全の体制でサポート。2021年ホースシェルターに入厩した馬は７頭。そのうち２頭が卒業し、提携する施設へと巣立ちました。既に競技馬として頭角を見せ、早くも競技会に参加するなど次のステージで輝いています。４馬房あるシェルターは常に満杯で入厩希望の声も後を絶ちません。現在在厩している中には、競走馬時代に 19 勝もあげたナリタミニスターも入厩中。ホースシェルターの取り組みはシェルターサポーターの会費によって賄っています。

※ホースシェルターは（株）TCC Japan の商標登録です。



馬を revive! 「活かす」 ウマシェア

ホースシェルターを卒業した馬たちのセカンドキャリアは様々。乗馬クラブ・養老牧場・ホースセラピーなど、適性に応じたステージへと巣立っていきます。TCC では全国各地の提携施設と提携し、所有権を持ったまま預託しながら、ふれあいや乗馬レッスンなどの会員サービスに活用。ウマシェアは、みんなで馬との関わりを少しずつ分かち合い、引退競走馬の次の居場所や活躍の場をつくることを目的とした、TCC が提案する新しいオーナーシェアの形と言えます。気軽に馬に会いたい、ふれあいたい、馬好き同士繋がりたい、そんな想いを実現できるメニューやサービスを提供しています。2021 年 12 月現在、38 頭が全国 31 カ所の提携施設に在厩。10 月には TCC として初めてとなる引退種牡馬ザサンデーフサイチの入厩もありました。感動や熱狂をくれた馬たちのその後を共に歩んでいきます。

馬を support! 「支える」 ウマハグ

2022 年 2 月、オーナーと支援者様をマッチングし、働けなくなった馬の余生を支えるサービス「ウマハグ」がスタートしました。馬の寿命は約 30 年。高齢や怪我を理由に一線を退いた馬たちを養うには、経済的な支援が必要です。支援者様には、オーナーごとの特色が出たオリジナリティーあふれる特典をご用意。TCC ホースに限らず、１頭でも多くの馬の余生を支えたい、そんな想いから生まれたマッチングプラットフォームです。また、TCC では働けなくなった馬を支える独自の年金システム『TCC みらい基金』を設立。馬の余生を「支える」ために、オーナー会費の一部や TCC オンラインストア購入金額の一部を積み立てるとともに、法人・個人のみなさまよりご寄付を募っています。

act.2 引退競走馬をパートナーとした事業活動

ホースセラピー PONY KIDS

PONY KIDS では引退競走馬をパートナーに、障害を抱える地域の子供たちに、馬との関わりによって発達を支援するホースセラピーを主とした療育を行っています。子供たちのペースに優しく寄り添うことができるのは、人の感情を読み取るのに長けているサラブレッドだからこそ。TCC セラピーパークでは現役時代に重賞レースを２勝しているメイショウナルトと競走馬時代から人懐っこく可愛がられたラッキーハンターがセラピーホースとして大活躍中。障がいの有無や老若男女問わず、人を癒すというメンタルヘルスケアの分野でも引退競走馬は大きな可能性を秘めています。

観光養老事業

メタセコイア Farm（仮称）

滋賀県高島市マキノにあるメタセコイア並木プロジェクトがいよいよ始動。年間 20 万人が訪れる観光地であり、近年はインスタスポットとして人気の高いエリアに隣接する TCC セラピーパークに次ぐ、新たな自社施設となります。並木を馬車で走ったり、えさやり体験をしたり、馬とさんぽしたり。普段は遠い存在の馬たちを、もっと身近に感じられる場所。乗馬クラブでもない、観光牧場でもない、大地に根付く植物と建築、そして馬と人が共生する唯一無二の空間づくりを進めています。

TCC Japan's Activity introduction

act.3 引退競走馬支援の啓発活動

TCC では創設当初より、競馬場などでの普及イベントの取り組みを行ってきました。過去には、東京競馬場や中京・阪神競馬場などで開催されたイベントへの参加、金沢競馬場での協賛レース実施、競馬場での写真展開催などの実績があります。また、JRA 新橋 GateJ での講演会への参加や、メディア対応など、引退競走馬支援の発信を行ってまいりました。今後より一層啓発活動に取り組むべく立ち上げた「馬のみらいアクション」。啓発活動の為の販促物の製作、そして製作した販促物を用いた啓発活動を進めていきます。競馬場などでの啓発イベントや協賛レース、支援者交流会などを通じ、引退競走馬への支援が当たり前に取り組める社会に、支援ではなく当たり前の取り組みとなる世の中に変えていきたいです。一人ひとりが出来る小さなアクション。その一歩を踏み出して下さることで、馬のみらいが変わります。

#ウマミラ！ 今こそ、みんなで一丸となってムーヴメントを起こしましょう。

あなたにできること

Let's take action! Uma

個人の皆さま

引退馬ファンクラブ TCC に入会

馬への直接的な支援活動として、引退競走馬を救い、活かし、支えていく「TCC 会員」を募集しています。全国にいる TCC ホースに会いに行ったり、会員同士仲良くなったり。馬友時間をはじめませんか。

TCC 入会はこちら

TCCみらい基金に寄付する

TCC みらい基金では、一口 1,000 円からご寄付を募っています。働けなくなった馬を支える為の飼育費用や治療費、余生を全うする為の居場所づくりに活用させて頂きます。

TCC みらい基金はこちら

お買物で応援する

TCC ONLINE STORE では、馬を身近に感じられるオリジナルアイテムを販売しています。収益は、「馬と共に社会をゆたかに」する活動全体に活用するとともに、1 点につき 100 円を「TCC みらい基金」に積み立てています。有名ブランドや作家さんとのコラボ商品など限定商品もたくさん。お気に入りのアイテムがきっと見つかります。

TCC ONLINE STORE は こちら

活動を広める

TCC の SNS では、全国の TCC ホースの日常や、引退競走馬の支援活動を発信しています。フォロー&リポストすることで、多くの方の目に留まります。TCC と一緒に引退競走馬支援活動を広めませんか。

Instagram　twitter　facebook　Youtube

法人の皆さま

本冊子を店舗やイベントで配布

本冊子を設置して下さる企業・店舗・団体の皆さまを募集しています。より多くの方に引退競走馬支援活動を知ってもらうために、ご協力をお願い致します。※冊子代・送料代などの負担は一切ございません。

寄付型自動販売機を設置する

啓発のためのオリジナルラッピングを施した寄付型自動販売機の設置を進めています。飲料購入代の売上の一部が TCC の引退競走馬支援活動に寄付される仕組みです。設置をご検討いただける事業者様は、お気軽にお問合せ下さい。

ウマミラパートナーになる

馬のみらいアクションの法人パートナーとして一緒になって啓発活動に取り組んで頂ける企業様を募集しています。社内向けのセミナーやイベントの開催など、TCC と共に啓発活動に取り組みませんか。

マーケティングパートナーになる

貴社の商品の売り上げの一部や、TCC とのコラボ企画商品など寄付付き商品の販売、社会貢献活動によって集まった募金を通じてご支援いただくことが出来ます。

お問い合わせ

株式会社 TCC Japan
本社：〒 520-3017 滋賀県栗東市六地蔵 31-6
TCCセラピーパーク
HP: https://tcc-japan.com
tel:077-584-5945　mail : info@tcc-japan.com

Staff credit

編集長　平林 健一
編集　緒方きしん
片川 晴喜
手塚 瞳
秀間 翔哉
デザイン　椎葉 権成
写真　Ryosuke KAJI
手塚 瞳
株式会社 Creem Pan
写真提供　警視庁
取材協力　加藤 しのぶ
境野 銀士朗
堀内 信彦

福永 祐一

緑の馬牧場
場長　新田 幸次郎

TCC セラピーパーク

制作　株式会社 Creem Pan

発行　株式会社 TCC Japan
代表取締役　山本 高之

Special thanks

安部 早苗　小崎 綾也
競走馬のイラストグッズ・ぱかぱかしょっぷ
全国競馬産業連合会
辻野 香織　和田 里香　和田 靖史
ヴォイジャー　今野 知子
有限会社ラルク　長谷川 亮
山村 翔　荒木 理子　和田 竜二
日高の狸　堀井商店　シャルロット
馬で人生を変える　guestbd9fb4185054
宮地 昭子　栗田 都
樋口 慎一　三戸 百合香
夏目翔@けものべ本舗なつめかける
ゆみ　ALLY　さくら＾∀＾くん
Kei & Yasuyo Yoshida
Gunma3　乗馬プラザ・ホースツリー
（敬称略 順不同）

竹村商事株式会社

本書を通じて多くの人々が
引退競走馬の“今”を知り、馬の未来を照らす
アクションが生まれることを願っています。

TCC Japan